

## WILLIAM GOLDING における二つの世界

杉村泰教

Golding の作品は、今までに様々な角度から解釈されているが、単に筋や内容だけから作者の意図を読みとることは困難である。作者は、いかなる作品においても安易な解決を求めず、結末はいつも多様な意味を含み、決して単純ではない。

ここで私は、作品にあらわされた image 群を考察することにより作者の意識を探り、そこから Golding の二つの世界を明確にして、彼が究極的には、この二つの世界の融合を求めていたことを明らかにしたい。

Golding の作品にあらわれる image 群は、大旨二種類に分けることができる。仮にそれらを (A) 群、(B) 群と名づけるとすれば、(A) 群には、花、果実、蝶、蜂、小鳥、星、月、太陽など、(B) 群には、蠅、死骸、汚物、血、暗黒などが含まれる。(A)、(B) は明らかに相反する性質をもっている。先ず、はじめに、この二種類の image 群が作品の中でどのような効果を生み出しているかを各作品の中で検討してゆきたい。

*Lord of the Flies* の冒頭で、すでに二種類の image がはっきり現われている。

He was clambering heavily among the creepers and broken trunks when a bird, a vision of red and yellow, flashed upwards with a witch-like cry;<sup>1</sup>

“a bird” を (A) 群の image とすれば、“a witch-like cry” は、明らかに (B) 群の image であり、この二つは相反する性質をもって不調和で不気味な雰囲気をつくり出している。この場面は、二人の少年 Ralph と Piggy が絶海の孤島の密林の中から姿を現わすところで、まだ筋は全く進展していないが、この不調和で遊離した image がかもし出す雰囲気が作品の基調をなすものとして一つの伏線となっている。このような風景は、たとえば、美しい星座の下

<sup>1</sup> William Golding, *Lord of the Flies* (London: Faber paper covered editions, 1973), p. 7.

でくりひろげられる大人の世界の凄惨な空中戦とか、日中は、さん然たる太陽や甘い空気、珊瑚礁のかなたにあらわれる蜃気楼などに満ち足りた喜びを感じず一方、日が沈むと暗黒の恐怖にうちひしがれる、といった描写の中にくり返しあらわれるが、それが極めてはっきりと眼前に迫ってくる描写は次の箇所である。

The spear moved forward inch by inch and the terrified squealing became a high-pitched scream. Then Jack found the throat and the hot blood spouted over his hands. The sow collapsed under them and they were heavy and fulfilled upon her. *The butterflies still danced, preoccupied in the centre of the clearing.*<sup>1</sup> (イタリックは筆者)

この場面は Jack を隊長とする狩猟隊が一頭の雌豚を追跡し、ついに喉をかき切って殺してしまうところである。血まみれになった雌豚がよろめいて逃げこんだ空地には、あざやかな花が咲き、二匹の蝶が輪を描いて飛びかっている。とどめをさされた豚の横では、まだ蝶が無心に舞い続けているのだ。image 群 (A), (B) は、ここにおいて互いに全く遊離し、まるで吐き気を催すような異様な空気が漂っている。

一方、いつも単独行動をとる不思議な少年 Simon の周辺は、どのような風景が描かれているか。Ralph や Jack と行動を伴にしていた Simon は、途中で彼らから離れ、一人森の中へ入ってゆく。そこは花が咲きみだれ、熟した果実の香りが漂い、蜂や蝶が飛びかっている。奇怪な鳥の鳴き声も夕闇につつまれてかすかにしか聞こえない。あたりはしだいに涼しくなり蜜色の淡い夕日の中に、ほの白い花が開いている。ここでは他の場面にみられるようなどぎつい原色はすべて中間色に変えられ、image はある程度、調和したものになっている。

Darkness poured out, submerging the ways between the trees till they were dim and strange as the bottom of the sea. The candle-buds opened their wide white flowers glimmering under the light that pricked down from the first stars. Their scent spilled out into the air and took possession of the island<sup>2</sup>

暗黒も、ここでは他の少年が恐れたような不気味なものではなく、天体の image と花の香りによって、ほどよく和らげられている。

Simon を包む image が、ある程度調和しているのは、彼が自己の内なる暗

<sup>1</sup> Ibid., p. 149.

<sup>2</sup> Ibid., p. 62.

黒を認識し、それとの戦いをとおして自己分裂を解決させようとする姿勢のあらわれである。第八章の後半は Simon が捧物にされた豚の首(蠅の王)と対決する場面である。“Even the butterflies deserted the open space where the obscene thing grinned and dripped.”<sup>1</sup> という描写を「蝶」の image に関して、先程の狩猟隊が雌豚を殺した時の描写と比較すると、狩猟隊の少年と Simon との相違がますます明確になる。この場合、Simon は「暗黒」と真正面から取り組んでいるのであり、そこに (A) 群の image の立ち入る余裕はない。この戦いに Simon は敗れ、狩猟隊の少年達に怪物と誤解されて殺されてしまう。しかし Simon の死骸を包む風景の image を見逃すことはできない。

Somewhere over the darkened curve of the world the sun and moon were pulling; and the film of water on the earth planet was held, bulging slightly on one side while the solid core turned. The great wave of the tide moved further along the island and the water lifted. Softly, surrounded by a fringe of inquisitive bright creatures, itself a silver shape beneath the steadfast constellations, Simon's dead body moved out towards the open sea.<sup>2</sup>

これは、もし Simon が生き存えていたならばあるいは到達し得たかもしれない境地とも言えるもので、image 群 (A), (B) の究極的な融合を示している。光り輝く生物は、死骸を食いつくす不気味な存在であり、それが無数にまつわりついた風景は、明らかに (B) 群の image である。しかし、それを包みこむ大宇宙、夜空にちりばめられた星座の下で、それに呼応するかのように銀色に輝く姿となった Simon の遺体は、(B) 群の image を完全に包括する高次元のものとなっている。

ここで最も重要な image は天体すなわち宇宙である。Simon 以外の少年たちは、すでに “. . . they grew accustomed to these mysteries and ignored them, just as they ignored the miraculous, throbbing stars.”<sup>3</sup> のように、神秘的宇宙を無視している。しかし Simon は、たとえ部分的にせよ、このような宇宙の神秘を image として直観していたのであり、自己分裂を解決させるためには、宇宙の真理に触れなければならないことを知っていた。しかし彼が「蠅の王」との戦いに敗れたのは、この本質直観が未だ不十分だったことを示すものである。そして作者は、この作品の最終章の形式的な結末よりも、む

<sup>1</sup> Ibid., p. 152.

<sup>2</sup> Ibid., p. 170.

<sup>3</sup> Ibid., p. 63.

しろ、この部分に一層の重点を置いているように思われる。これほど精妙を極めた豊かな image は、この作品に関する限り、他のどこにも見当たらない。

この Simon なる人物を、復活せざる救世主と見る<sup>1</sup>よりも、単に、他の少年たちの中でとりわけ物事を包括的に把握する感受性にすぐれているだけだと見る<sup>2</sup>ほうが妥当であろう。彼を人間ばなれした存在に祭り上げることが作者の意図ではないからだ。

Simon を更に徹底させたものが *The Inheritors* の中の Neanderthal 人である。Simon が宇宙を不十分にしかとらえていないのに対して Neanderthal 人は最初から、その包括的特質を直観していたように思われる。彼らの世界では、(B) 群の image は 'Oa' という女神を崇拝する一種の原始宗教によって、ある程度、感覚的に忌避されているが、だからといって全く (A) 群の image だけから成り立つ世界でもない。(B) 群の image は、うまく (A) 群と融け合っただけで自然の中に流れ去ってしまう。彼らは一見、自己の内なる暗黒に無知であるかのような印象をうけるが、作品をよく読めば、決してそうではないことがわかる。Neanderthal 人 Lok が妻 Fa とともに鹿を料理する場面は、*Lord of the Flies* の中で狩猟隊が豚を殺す場面とは異なり、image の分裂がない。Simon が「蠅の王」と直面しているのと同じように Lok も暗黒に直面し、それを克服しようとしている。

Yet there was a kind of darkness in the air under the watching birds. Lok spoke loudly, *acknowledging the darkness*. "This is very bad. Oa brought the doe out of her belly."<sup>3</sup> (イタリックは筆者)

彼は、見つめている鳥の下の方に暗黒があることを認め、たとえ罪はないとしても、自分の行動が非常に悪いということを知っているのである。<sup>4</sup> そして彼らは Simon と異なり、それを克服する力をもっている。そのことはこの場面の直後の風景が、きわめてさわやかな印象を与えることでもわかる。

The sun had cleared the mist now and they could see beyond the hyenas the heathery undulations of the plain and beyond it the lower level of light green tree-tops and the flash of water.<sup>5</sup>

<sup>1</sup> Bernard S. Oldsey and Stanley Weintraub, *The Art of William Golding* (Bloomington and London: Indiana University Press, 1968), p. 40.

<sup>2</sup> Mark Kinkead-Weekes and Ian Gregor, *William Golding: A Critical Study* (London: Faber Paperbacks, 1975), pp. 29-30.

<sup>3</sup> William Golding, *The Inheritors* (London: Faber Paperbacks, 1975), p. 54.

<sup>4</sup> M. Kinkead-Weekes and I. Gregor, *William Golding*, p. 80.

<sup>5</sup> Golding, *The Inheritors*, p. 55.

内面の暗黒が、ごく自然に外界と融け合って晴れてゆく様子が霞によって象徴されている。たしかに “There was such a mixture of darkness and joy in his head that he heard his heart beating.”<sup>1</sup> の中には、image の遊離もわずかながら見られるが “He talked to the darkness that had lain over the mouth of the gully.”<sup>2</sup> によって決然と暗黒に挑戦し、それを克服している。

Neandelthal 人にこのような能力を与えたのは、宇宙の真理に対する直観であり、彼らをとりにく風景は、この宇宙的 image の下で渾然と融合しあっている。とりわけ最後に Lok が、妻も子供も殺され一匹の赤い生物となって涙を流す場面は、Simon の死体が海へ流されてゆくときの風景と共通したものがある。

There was light now in each cavern, lights faint as the starlight reflected in the crystals of a granite cliff. The lights increased, acquired definition, brightened, lay each sparkling at the lower edge of a cavern. Suddenly, noiselessly, the lights became thin crescents, went out, and streaks glistened on each cheek. The lights appeared again, caught among the silvered curls of the beard. They hung, elongated, dropped from curl to curl and gathered at the lowest tip. The streaks on the cheeks pulsed as the drops swam down them, a great drop swelled at the end of a hair of the beard, shivering and bright. It detached itself and fell in a silver flash, striking a withered leaf with a sharp pat. The water rat scurried away and plopped into the river.<sup>3</sup>

これより先、Lok と Fa が、子供を取り返すために Homo Sapiens の陣地に忍びこんだ時、牡鹿の頭の捧物に出くわす場面がある。これも、*Lord of the Flies* の中で Simon が豚の頭の捧物に直面する風景と共通している。

The whole haunch of a stag, raw but comparatively bloodless, hung from the top of the stake and an opened stone of honey-drink stood by the staring head. . . .

. . . The reek from the open mouth of the pot was thick. *A fly meditated on the lip, then as Lok's breathing came closer, shuffled its wings, flew for a moment and landed again.*<sup>4</sup> (イタリックは筆者)

そして Lok と Fa は、この蜜すなわち酒を飲み干すわけである。この時点

<sup>1</sup> Ibid., p. 56.

<sup>2</sup> Ibid.

<sup>3</sup> Ibid., p. 220.

<sup>4</sup> Ibid., pp. 199-200.

から Simon の行動との相違が明瞭になる。Simon は、「蠅の王」に屈服し、否定されてしまうのに対して、Lok と Fa は、これを飲み干し、同化させようとする。一時的に彼らは屈服し、墮落してしまったかのような行動をとるが、次の場面が示すように、見事に同化に成功している。

He opened his eyes, blinked, and the world settled a little. There were still the blazing colours but they were not swaying. In front of him the earth was rich brown and red, the trees were silver and green and the branches were covered with spurts of green fire.<sup>1</sup>

最後の場面でも、Simon は「蠅の王」に屈服した形で死んでゆき、死した後、はじめて暗黒を同化吸収するが、Lok は、すべてを宇宙の中に融かしこんだ状態で、自然に死に至る。死の場面は、Simon も Lok も同質の image が使われているが、Simon は、やはり *Homo Sapiens* であり生きている間は宇宙を十分把握することができない。

一方、「後継者」となった *Homo Sapiens* 達の世界では、再び image 群 (A), (B) が二つに遊離してしまっている。

The world with the boat moving so slowly at the centre was dark amid the light, was untidy, hopeless, dirty.<sup>2</sup>

そこには、嫉妬があり権力欲がある。Tuami は、自分の女 Vivani が Marlan に身を任せているのを見て、彼を象牙の短刀で殺そうとする。しかし、Vivani の胸に抱かれた Neandelthal 人の赤ん坊のしぐさを見ているうちに、ようやく自分達の世界が罪に汚れたものであることを悟りはじめる。

*Homo Sapiens* の中で、この Tuami だけが世界と自己の暗闇に気付きはじめている。しかし、まだ、はっきりと客観化するには至らない。物語は、光と闇の奇妙に分裂した光景の中に幕を閉じる。

この分裂を、どのように融合してゆくかが今後の人類の課題となってくる。*Pincher Martin* は、この分裂を極限まで推し進めたらどうなるかという実験であり、*Free Fall* や *The Spire* の主人公は、宗教による融合を目ざすが成功していない。

*Pincher Martin* の中で、Martin は、Nathaniel に代表される神聖な世界と、うじ虫の群がる死骸や汚物で満たされた暗黒の世界との狭間に宙づりになる。彼は、Simon とは逆に、暗黒の世界に魅了され、神の世界に挑戦する。分裂

<sup>1</sup> Ibid., p. 206.

<sup>2</sup> Ibid., p. 225.

は、ますますひどくなり、grotesque な風景が至るところに見出される。特に、この小説では排泄物の image が頻繁に使用され、Martin がそれに執着する状況が描かれている。“I shit on your heaven!” “salty, uretic water” など、あからさまに不快感を催させるような糞尿の比喩の行列が続く。<sup>1</sup> なかでも第十一章に描かれる “makeshift self-enema” の “explosive scene” は、この種の image の最たるものである。<sup>2</sup> そして、Tchaikovsky や Wagner や Holst の厳粛な background music と相俟て滑稽なほど奇妙で grotesque な風景をつくり出している。

It was like the bursting of a dam, the smashing of all hindrance. Spasm after spasm with massive chords and sparkling arpeggios, the cadenza took of his strength till he lay straining and empty on the rock and the orchestra had gone.<sup>3</sup>

実際、これほど極端な image の遊離は Golding の他のどの作品にも見られない。

Martin が破滅するときの “black lightning” はそれ自身の内部に、全く相反する二つの image を含むものとして、この作品の結末にふさわしい。

一方、*Free Fall* の Sammy Mountjoy は、分裂した自己を宗教によって統一しようとする。しかしその失敗は冒頭の一節によって明らかである。Sammy は、hosanna の叫びを聞き、Pentecost の時のような奇蹟が自分の身に起こるのも感じているが、依然として非合理的なものに身を引き裂かれているからだ。

小説は、Sammy が幼年時代から今に至るまでどのようにして無垢を喪失し、自由意志を失って墮落してしまったかを、時間の順序を無視して詳しく報告している。学生時代、Sammy は Rowena Pringle から宗教を学び、Nick Shales から自然科学を学んだが、Nick Shales の人格にひかれて科学的合理主義に傾斜してゆく。その結果、彼の世界は分裂し、自己の内部にも分裂を起こして、言わば「合理主義的」に手に入れた Beatrice をも、“I could not accompany her. My instrument was flat.”<sup>4</sup> という惨憺たる結果となって、愛することができず捨ててしまう。

<sup>1</sup> B. S. Oldsey and S. Weintraub, *The Art of William Golding*, pp. 98-99.

<sup>2</sup> *Ibid.*, p. 98.

<sup>3</sup> William Golding, *Pincher Martin* (London: Faber paper covered editions, 1969), p. 165.

<sup>4</sup> William Golding, *Free Fall* (London: Faber Paperbacks, 1974), p. 118.

これを境にして Sammy の世界は、分裂した image の不気味な風景にうつりかわってゆく。戦時中、彼は Nazis に捕えられ真っ暗な部屋の中に一時、監禁される経験をする。そこで、はじめて暗黒の世界に直面するが、自己の内部を直視するよりもむしろ、そこから逃避して他に救いを求める。“Help me! Help me!”<sup>1</sup>

だから、闇から出された時も、依然、外界の光と自己の内なる暗黒とが分離してしまふ。Sammy は、つぎに Rowena Pringle の宗教の世界に入ることによって、この分裂を統一しようとするが、大戦後、精神病院に隔離されている Beatrice に面会した瞬間、この統一はすっかり崩れてしまふ。

Beatrice pissed over her skirt and her legs and her shoes and my shoes. The pool splashed and spread.<sup>2</sup>

貞淑な “Beatrice” と “piss” の衝撃的な対照に、彼の心は再び引き裂かれ、その場で気を失ってしまう。そして今もまだ解決できないままである。この分裂の狭間を無限に転落することを、作者は “free fall” と名づける。

結局、Nick の世界も Miss Pringle の世界も、ともに Sammy にとっては不十分なものであった。

彼は Nick の世界を “It was not enveloping; each small experimental result was not multiplied out to fill the universe.”<sup>3</sup> と批判し、Miss Pringle の世界を “For this mode which we must call the spirit breathes through the universe and *does not touch it; touches only the dark things*, held prisoner, incommunicado, touches, judges, sentences and passes on.” (イタリックは筆者)<sup>4</sup> と批判する。この批判は、Sammy が無意識のうちに、“the universe” の真の姿に触れたいという願望をあらわすものとみることができる。そして彼が “There is no bridge.”<sup>5</sup> と断言しているのも、無意識のうちに科学と宗教に橋をかけたいという願望があるからである。すなわち科学と宗教が互いに相手の立場を認めない限り、宇宙の真の姿はとらえられない。宇宙の真理をとらえられない限り、世界も自己も分裂する。これは、Golding 自身の主張であり、作者は、ここに、Sammy の分裂の原因を求めている。Golding が自己分裂の統一を、この宇宙の調和した姿の中に見出そうとしていることは、すでに *Lord*

<sup>1</sup> Ibid., p. 184.

<sup>2</sup> Ibid., p. 243.

<sup>3</sup> Ibid., p. 212.

<sup>4</sup> Ibid., p. 253.

<sup>5</sup> Ibid.



of the Flies や Inheritors の中で、宇宙の image が、他のあらゆる image のうち、とりわけ迫力ある描写になっていた事実によって裏づけられる。

神学者 Paul Elmen によれば、Golding は、経験の複雑な構造の相反する二面をひっくるめて受けいれているが、これは神学的に見ても健全であるという。<sup>1</sup> この二面性を包括するものとして Golding は、Simon や Lok の宇宙を考えているのである。

キリスト教に救いを求める Sammy を、更に徹底させて専門の牧師にしたのが、*The Spire* の Jocelin である。分裂した自己を宗教によって統一させようとする点では Sammy と同じだが、Jocelin は、更に尖塔建立によって、この統一を完成しようとする。しかし地盤が悪く、尖塔は思うように建たない。そして犠牲者まで出してしまふ。辛うじて建てられた尖塔は最後まで安定せず、Jocelin の自己分裂も最後まで解決できない。

彼が最初、これから建設される尖塔の模型を見て、ひそかに 'phallus' を連想するところで、すでに作品全体の基調を感じとることができる。日光の中に漂う土埃り、彼の靴に、いやらしく付着する mistletoe の腐りかけた実などの風景も、“sun”—“dust”, “mistletoe”—“obscenely” が、それぞれ奇妙な対照をつくり出している。

地盤の崩壊、嵐、労働者の職務放棄、姦通、殺人、教会員の非難などの試練を経て、なんとか完成にこぎつけるが、すでに Jocelin は、持病の脊椎結核が悪化して余命いくばくもない。ある日、彼は日光の中に輝く一群の天使の幻を見る。それは天に地に、泉に、大理石に、リンゴの樹に群がり、空のすべての青さが凝縮してサファイアのような一羽のカワセミとなり、一瞬、輝きを発する。この中の “kingfisher” の image は、たとえ刹那的であるとしても、星座の如き宇宙の image をあらわしている。これは Simon の最後の場面にも通ずるものであるが、Simon の宇宙が永遠であるのに対して、Jocelin の “kingfisher” は “an arrow shot once”<sup>2</sup> であって、二度ともどってこない。安定した尖塔が幻にすぎないのと同様、彼の世界の融合も一瞬の幻にすぎない。

臨終に際して Jocelin が Father Adam に告白したことばは、結局この作品の最初の image, “spire”—“phallus” に回帰している。

He looked up experimentally to see if at this late hour the witchcraft had

<sup>1</sup> Paul Elmen, *William Golding: Contemporary Writers in Christian Perspective*, ed. by Roderick Jellema (Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 1967), pp. 33-34.

<sup>2</sup> William Golding, *The Spire* (London: Faber paper covered editions, 1974), p. 205.

left him; and there was a tangle of hair, blazing among the stars; and the great club of his spire lifted towards it. That's all, he thought, that's the explanation if I had time: and he made a word for Father Adam. 'Berenice.' The smile became puzzled and anxious. Then it cleared. 'Saint?'<sup>1</sup>

Jocelin の “Berenice” は、星座 Berenice's Hair であり愛欲の対象 Goody Pangall の流れるような髪であるのに対して、敬虔な Father Adam は、それを Saint Berenice だと思いこむ<sup>2</sup>ところは稽滑である。そして死の真際に Jocelin は、尖塔を、“*It's like the appletree!*”<sup>3</sup> と見る。善悪を知る木、“*appletree*” は、地上と樂園、人間と天使、墮落と救済のどちらの世界にも触れるものであり、<sup>4</sup> 言わば、善にも悪にも通ずるもので、“*rise*” と “*fall*” の境界に建つ尖塔の根本的な不安定感をあらわしている。

以上の作品に見られるように、Golding は、二つの世界を対照的な image によって描いている。この対立する二つの世界をどのようにして調和させてゆくかが、彼の課題であるが、すでに *Free Fall* や *The Spire* の中で見てきたとおり、彼は科学だけ、とか宗教だけに、その解決を見出さない。それは、*Free Fall* で Sammy が批判するとおり両者とも宇宙を半分しか解明できないからである。すでに各作品で述べてきた image が証明しているように、Golding の宇宙とは、二つの image 群 (A), (B) の象徴する分裂した世界を調和させて高次元の融合を図る。彼は、この宇宙の真理に解決を求めており、そのためには科学と宗教が表裏一体となって宇宙解明に協力しなければならない。“*Science was busy clearing up the universe. There was no place in this exquisitely logical universe for the terrors of darkness. There was darkness, of course, but it was just darkness, the absence of light; had none of the looming terror which I knew night-long in my very bones.*”<sup>5</sup> のように科学の解明する宇宙は、極めて論理的であり合理的であるが、それは単

<sup>1</sup> Ibid., p. 221.

<sup>2</sup> Paul Elmen, *William Golding*, p. 40.

<sup>3</sup> Golding, *The Spire*, p. 223.

<sup>4</sup> Samuel Hynes, *William Golding* (New York and London: Columbia University Press, 1968), p. 44.

<sup>5</sup> William Golding, “The Ladder and the Tree,” *The Hot Gates and other occasional pieces* (London: Faber paper covered editions, 1974), pp. 172-173.

<sup>6</sup> Golding, *Free Fall*, p. 253.

なる現象にすぎない。その結果、宇宙の真の姿を見失い、世界が二つに分裂しているのだ。

一方、“For this mode which we must call the spirit breathes through the universe and does not touch it; touches only the dark things, . . .”<sup>6</sup>のように宗教も宇宙に触れることができず、やはり世界は分裂してしまう。

このような Golding の宇宙観は、科学的宗教ともいふべきものであり、宇宙の科学性と神秘性を兼ね備えたものとして興味深い。それは、現代社会の科学万能主義と、およそ非科学的、荒唐無稽な宗教を共に批判するものであり、このいずれもが「真理」——あるいは「神」を探求できず、分裂した世界の谷間に転落することを示唆している。

1980. 9. 11 受理